

---

# 死生の魔眼

紅炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死生の魔眼

### 【Nコード】

N0791D

### 【作者名】

紅炎

### 【あらすじ】

ある日浅野健介は不思議な瞳を授かる。その日を境に、彼の日常は一変。悲劇が彼に襲い掛かる。命あるものは必ず死ぬ。そして絶対に蘇りはしない。その「普通」が、一瞬にして覆される。そして、彼には重く苦しい使命が課せられる。 死生の魔眼と共に。

## プロローグ

星影一つ無い、不気味なほど黒く淀んだ夜空。そして夜とはいえ、普通では無いくらいの静寂がこの町を包み込んでいた。

夜遅いため、どの家々も明りが消え、静まり返っている。

ある一軒家を除いては。

その一軒のみ、明りが付いていた。薄暗い光が、ある部屋のカーテンの粕かな隙間から、外へと漏れ出ている。その光が、暗闇で満ちた町では異様に目立つ。

そしてその家から、粕かに叫び声のようなものが聞こえた。耳を澄ますと聞こえるぐらいの、本当に小さな叫び声。効いた感じから察すると、どうやら男声のよう。

その家の中はその叫び声で満ちている。悲痛を訴えるようなその声は、家全体にその声が響き渡っていた。

そしてその声は二階の、光が漏れ出していたあの部屋から聞こえて来る。

薄暗い光で満ちた部屋。そんな中で、少年が床に一人蹲っていた。  
「あ……熱い。……目が……熱いっ……！」

少年は蹲り、右目を片手で押さえている。熱い、熱いと何度も呟きながら叫び、もがく。

しばらくして、痛みが治まったのか、少年は黙り込んだ。額には脂汗をかき、荒く呼吸しながら立ち上がった。

「あの痛み……何だったんだ」

そう呟いた後、少年は部屋に吊るしてある鏡を見た。そして、鏡に映る自分を見て唖然とした。声が出せない。体が突然震え出す。

鏡には、不気味な色をした瞳。紫色の瞳を持つ少年の姿が映っている。彼の左目はごく普通の黒い瞳。しかしもう一方の目。右目の方は、紫の瞳。

「な……なんだよ、この目……」

「死生の魔眼さ。気に入ってくれたかい？」

突然聞こえた自分以外の声に、少年は驚き、後ろを振り返る。しかし誰もいない。部屋にいるのは自分だけ。声のみ聞こえて来る。子供のような、幼い声。

「何だよ死生の魔眼って！ 俺の右目はどうなったんだよ！」  
誰も居ないのに、少年は叫ぶ。勿論返答は無い。彼の怒声だけが、部屋に反響する。

部屋に居るのは、化け物の様な紫色をした瞳を持つ自分だけ。突然虚しく、辛くなり、少年は目を閉じた。哀しみの気持ちか、怯えた気持ちか。そんな思いだけで彼の心は満ちた。

死生の魔眼。それは今、彼の右目となった。

## 第一章

部屋にカーテンの隙間から眩しい朝日が差し込む。

その朝日が少年の顔に直撃する。少年は眩しそうな顔をしながら、目を覚ました。

起きたばかりなので、何やら不細工な顔になっている。左目は瞑っていて、右目のみ開いている。髪が爆発したようになっていて。彼は床で寝ていた。何も被らず、冷たく冷え切った床の上で寝ていた。そのせいもあり、少年は風邪を引いてしまったようだ。先程から妙に咳き込んでいる。

「眠い……」

風邪を引いているためか、声はがらがらで掠れている。そんな事を言いながら歩いていると、鏡の前に差し掛かった。そして鏡に映った自分の姿を見た。

けれど、少年は何も驚かない。

何故なら彼の右目は普通の目。漆黒の瞳。左目とまったく同じだ。紫色の瞳なんかじゃない。少年は頭を掻きながら、眩いた。

「昨日のは夢だったのかなあ……」

ようやく目が覚めたらしく、両目ともパツチリと開いている。鏡に映る自分の右目を見ながら、少年は何やら唸っている。

「まあ、悪い夢だったって事にしよう」

一人で納得して、一人で笑っている。なんて前向きな性格なんだろうか。

そして少年はパジャマのまま、部屋から扉を開けて、出ていった。部屋には誰も居なくなり、扉が閉まる音だけが響いた。

少年は廊下の突き当たりにある階段を降り始めた。ちゃんと手すりも持っている。ゆっくりゆっくり一段ずつ降りていく。音を立て

ないように、ゆっくりと歩く。

順序良く降りれて、最後の一段つて時に、階段の軋む音がした。それは静かな家の中に大きく響き渡った。

「遅い！」

その直後に、怒ったような声が聞こえてきた。それが聞こえた途端、少年は大きく溜息をついた。小さな声ではれちまった、と呟く。

少年は階段を降りきった後、一階の廊下を進み、リビングと繋ぐ扉を開いた。

「おはよう」

少年は愛想笑いしながら入ってみた。しかし、それは意味無し。「起きるの遅いよ健介。いつまで待たせる気なのよ」

リビングにあるテーブルの椅子に、セーラー服を着た少女が一人頬を膨らまし、機嫌が悪いのが丸分かりの状態で、座っている。健介と呼ばれるその少年はまた頭を掻く。とてもだらしない光景だ。「あのなあ、綾香がいるのが悪いんだろ。何で一々俺の家に上がって来るんだよ」

「だって健介のお母さんが、家に上がって待ってて。って言うんだもん」

彼女 綾香は笑顔で答えた。健介は小さくお袋の馬鹿、と呟いた。

そんな時、健介は急に左目を押さえてしゃがみ込んだ。

「どうしたの健介？」

綾香が健介に少し心配そうに話し掛ける。健介は少し笑いながら大丈夫。左目にゴミが入っただけだから、と呟いた。

健介は左目を睨みながら、右目だけで椅子に座る綾香を見上げた。すると、丁度綾香の胸のところに赤色の数字が浮び上がっていた。



## 第一章（後書き）

今回、主人公の名前がやっと明らかになりました。そして綾香も登場いたしました。

ここからどのように話が展開するのか。それを考えながら、読んで下さると嬉しいです。



## 第二章

赤い数字。それが綾香の胸の前で浮き出ている。血の様に、赤黒くて不気味な数字。それは「1」となっている。そしてその数字の横には、時間という言葉があつた。全部通して読むと、「1時間」という言葉になっている。

気になった健介は、思わず口を開いた。

「おい綾香。何だその数字？」

健介は少し驚いた口調で話す。そして健介は指で彼女の胸の辺りを指す。その言葉に綾香は戸惑った。数字？ と呟きながら自分の胸の辺りを見る。

「……どこ？ どこに数字なんてあるの？」

「ほら、そこだつて。赤色で「1」の数字があるだろ」

健介は怒鳴りながら、何度も何度もそこを指さす。その度に彼女は探す、どこにも見当たらないようだ。ふざけているのか？ と健介は思い、一つ溜息を付く。

「あのなあ……」

そう言つて、左目を押さえていた手を退けた。

すると、不思議な事に今まで健介が見えていた赤黒い数字と、時間という言葉が消えた。空気に溶けるようにして消えた。健介は驚き、声を漏らしてしまう。

「あれ？ ……消えた？」

そんな情けない声がりびングに広がる。健介の言葉を聞いた綾香は、口に手を当て、笑い出した。

「健介寝ぼけてたんだよー。それにしても変な事言つてたね」

「ち、違うぞ！ あれは寝ぼけてたんじゃ」

健介が慌てた様子を見せながら、必死に弁解しようとするが、綾香は笑いながら適当に促すだけで、健介の話をちゃんと聞かない。

再び必死に弁解しようとするも、とうとう健介の声は綾香の声に遮られた。

「はいはい。もう行こうよ。学校遅れちゃうよー」

「あ、ちよつと待て。俺まだ、朝飯食ってないんだぞ！」

健介は慌ててテーブルの上に置いてある、ロールパンを一口に啜える。本当は焼いた方が美味しいらしいのだが。

そんな事をしている間に、扉が開く音と、閉まる音がした。綾香が外に出て行ったようだ。それを見垢らって、健介は制服に着替える。着用していたパジャマを脱ぎ捨て、ハンガーに掛けておいた制服に手を伸ばす。

健介は跳ねまくっている自分の髪を気にしていたが、手入れもない。彼は玄関に置いてあった通学用の鞆を手に持ち、靴を履き、外に出ようとする。

「死生の魔眼、有効利用してよ」

そんな時に、声が聞こえた。何処からとも無く聞こえた。健介は後ろを振り返り、冷や汗を流す。健介は確信していた。昨日聞いた声と同じだと。子供のようない声。健介は辺りを見回す。誰も居ない。居る筈が無い。

それから静寂が続いた。もう声は聞こえない。健介は未だ不信な表情で、家から出て行った。

パタン、と扉が閉まると同時に、「あはははは」という無気味な笑い声が響いた。

その声は何度も何度も反響していた。

外に出ると、そこは別の世界のようなだった。空は非常に蒼く透き通っていて、太陽の厳しい光が降り注いでいる。とても眩しい。

綾香はそんな中、車庫の物陰に隠れていた。彼女の黒髪が風で靡

いている。木々もざわめいていた。

「健介。早く行こうよー」

彼女が呼びかけてきたので、健介は返事をし、綾香の下へと向かった。コンクリートの床なので、音が良く響く。

綾香の下に健介が着くと、綾香はゆっくり歩き出した。それと同じ時に、健介は同じ速さで歩き出す。二人は並んで話をしながら歩いている。

しかし。そんな時にも、健介は頭の隅で考えていた。

あの数字は。あの声は。……一体何だったのだろうか　と。

### 第三章

間一髪。

この言葉が、今の彼らにはお似合いの言葉だった。

「はあ……はあ……」

長く深いため息が、丁度教室の真ん中から聞こえる。その席には、教科書で顔を扇ぐ健介が座っていた。彼の頬を一粒の汗が流れる。

そして健介は一息ついた後、鋭い視線を隣へと向けた。するとそこには健介と同じように、教科書で仰いでいる少女の姿が。

「おい綾香！ お前のせいで遅刻するところだったじゃないか！」  
「だ、だからごめんってばー」

健介の怒声が少女 綾香の耳元で放たれる。その怒声に綾香は耐えて、ただ謝るしかなかった。

お前のせいだ。だからごめんってばー。

そんな凄まじい口論が交わされ続けていると、それを仲裁する声が入る。

「いやいやー。喧嘩するほど仲がいいとはこの事ですなあー」

「ああ。だがこの場合は、俺は健介が咲野をいじめているようにしか見えんのだが」

「うつわ。浅野、サイテーだね」

そんな弾んだ声の騒がしい会話が、健介と綾香の耳に留まる。そして二人は驚いた表情でその声が聞こえる方を見る。

「遼！ 時雨！ それに智子！」

そう健介は叫ぶ。そしてその直後に、遼と呼ばれる少年は口を開く。

「もー。健介君ってば。朝からいちゃつき放題ですなー」

そう言った直後、遼は健介の肩に手をするっと伸ばす。その直後

健介の背に寒気が走る。ひいつ、と健介は粕かに悲鳴を上げる。

「羨ましすぎるんだってー。このこのー！」

そう言いながら健介の脇をこそばかす。悪気は無い、ただじゃれ合っているような光景が、教室の真ん中で繰り広げられている。

「このっ！ この野郎！ こんちくしょー！」

「痛い！ 痛いってば。お前、なんか本気で怒ってない？」

次第に遼の言葉は荒々しさが表れ始め、とうとう健介の体を殴り始める。

刈り上げた黒髪。真っ直ぐな瞳。そして整った顔つき。黙っていたら、二枚目な小手川遼。悩みといえば、女のようなその名前ぐらいいだろう。

しかし。彼が口を開いたら最後。彼の本性は露となる。下品な喋り方な上、調子乗りな奴。それが小手川遼の本性である。

「やめなよ、気色悪いなあ！ ちよつとは大人しく出来ないの？」

そう言って、智子と呼ばれる彼女は、遼の頭に自慢の唸る鉄拳を喰らわす。鉄拳を喰らった遼は、その場にひれ伏した。

丁度肩辺りまでの茶髪のショートカット。少しパーマがかかったその髪は、非常に似合っている。澄んだ瞳も、非常に綺麗な石崎智子。綾香の親友で、何処にでもいるような女子高生だ。少しばかり、男勝りなその性格が悩ましいが。

「無駄だ石崎。こいつは単細胞で無鉄砲な猿だぞ。そんな高レベルな事、出来るわけないだろう」

その光景を冷静に見定め、適切な。または不適切な言葉を放つ。ほぼ罵倒や暴言に近いそれは、凄まじい勢いで遼の心を射抜く。

「な……。ひ、酷いよ時雨。俺たち、友達だろ！」

「ええい！ 抱きつくな、気色悪い！」

涙目で抱きついてくる遼を、時雨と呼ばれる少年は引き離そうと

抵抗する。

右目を覆い隠すように流れた、黒い前髪。そして知的な雰囲気漂浮させる、長方形のレンズをした眼鏡をかけている。吊りあがった鋭い眼光を持つ亮也時雨。冷静というか冷酷というか。何にせよ、一味違った雰囲気を持つ奴だ。

「で、ちょっと。話を戻していいかな？」

「え？ うん。智子何が聞きたいの？」

「何って。……ほら。あんたたちが遅刻寸前に、学校に着いたわけ」

智子は少し呆れた様子で綾香に問い掛ける。

すると綾香はえへへ、と頭を掻きながら恥ずかしそうな表情で説明する。

「えつとねー。私、通学中に凄い可愛い子を見つけたんだ。だから思わず駆け寄って、抱きついちゃったんだ。それで時間が遅れて……」

綾香は軽々とそうやってのけた。そして、全員の視線が綾香に向けられる。

「咲野……それはお前、不審者と同じだぞ？」

「そうだよ！ あんた、見知らぬ子に抱きつくんだなんて……。そんなの続けてたら、あんた本当に捕まるよ？」

「良いなー。その子、羨ましすぎるぜ」

遼は羨ましい、と何度も呟いた。

次の瞬間、彼に凄まじいローキックが炸裂したのは言うまでも無い。

「た、確かに分かってるよー。でも、体が反射的というか……。それに、その子本当に可愛いんだよ？ 緑色の髪をした、小学生くらいなの」

綾香は必死に弁解する。しかし、時雨と智子はため息をつくばかりだった。

「そうなの？ 浅野」

「いや、悪いけど俺は知らない。俺、その時コンビニで立ち読みして……」

次の瞬間、健介の腹部に強烈なエルボーがめり込む。そして健介は遠と同じように、教室の床に倒れ込んだ。

「綾香をほつといて何してんのよ！」

智子は倒れた健介に怒声を放つ。しかし、その声は聞こえるわけも無かった。

「で、その子に抱きついて。お前は何もなかったのか？ 通報とか、通報とか……」

「うっん。何にも無かったよ。ただ……」

「ただ？」

智子と時雨の声が一致する。それだけ、二人とも気になっているのだろ。変質行為を綾香が犯したのに通報されなかった。ならば、一体何を？

時間が過ぎる毎に、二人の期待は高まった。

お姉さん。死生の魔眼で見た運命は覆せないんだよ。かわいそうだけどね。

だからね、お兄さんに気持ち。早いとこ伝えた方がいいよ。

バイバイ。……永遠にね。

「……って言われちゃった。えへへ……」

綾香は微笑するも、周りの空気は冷たかった。

そして、健介と綾香が家を出て、四十分が経過しようとしていた。もう既に、悲劇は始まっていたのかもしれない。

血で染まる、あの悲劇の毎日が。

### 第三章（後書き）

すみません。非常に長くなってしまいました。  
ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。



## 第四章

綾香のその一言で、その空気は変わった。

一瞬で空気は冷たく、張り詰めたものへと変わった。先ほどまで明るかった笑顔が、急に絶える。

「あ、あはは。まあ子供の言う事だからね。そんなに信じないですよ。ほら、暗い顔なんてしないでってば」

そう言っただけ綾香は場の空気を変えようとする。彼女の気遣う言葉と苦笑が、朧かに場の空気を和ませる。先ほどまでの空気が軽くなる。

「そう……だよ。ははは。あたし何信じ込んでんだろ」

「そうだ。そんな事あるわけない。……なあ健介」

そう言っただけ時雨は話を健介へと振る。

「え？ ごめん聞いてなかったんだ。何だっけ？」

健介は腹を痛そうに押さえながら、床から立ち上がる。先程まで智子の強烈なエルボーで撃沈していたというのに。

そしてその時。健介は少しぐらついた。健介は再び倒れてしまいうことになる。しかし健介は机に手をつき、何とか体勢を整えた。

「ふう。危ない危ない」

そう言っただけ健介は汗を拭う仕草をする。安堵の表情を浮かべ、少し微笑む。

その時。その机に置いてあった一枚のプリントが、健介が手をついた衝撃で揺り動く。そしてそのプリントは、窓から流れ込む風に乗る。

「あ、私のプリントが！」

綾香は驚いて、自身の手を伸ばしてプリントを掴み取ろうとする。だがしかし、僅かにその手は届かず、プリントはそのまま風に乗って、逆側の窓から外へと飛んでいった。

プリントは華麗に宙を舞い、校舎の外の世界を優雅な様子で流れる。

「むうー。飛んでっちゃった……」

綾香は頬を膨らませ、残念そうな視線でプリントを眺める。それと同時に、一斉に皆の視線が一点へと集中する。

「俺のせい……だよなあ」

「ああ。お前意外に誰がいる」

時雨は容赦なく、健介へと詰めたい言葉を放つ。レンズを通して見える瞳は、非常に澄んでいて、冷たい。

「……ごめん綾香。ちよっと待っててくれ。今すぐ取ってくるからさ」

健介は綾香に軽く謝ると途端に、教室から飛び出そうとする。しかし彼の制服の裾が、小さな手で握られ、思わず彼は静止する。

「健介待って。私も行くよ。だって、あれ私のプリントだし」

「でも……。うん、分かった。一緒に行こう」

健介は仕方がないな、とぼやく。すると綾香はいいからいいから、と言って健介の裾を引っ張って行った。

校舎を出たと同時に、凄まじい太陽光線が二人を射る。鮮やかな蒼色の空に悠々と浮かぶ雲。その隙間から差し込む光景は、何とも言えない不思議な光景だ。

「ほら健介。早く行こうよ。早くしないと授業始まっちゃうし、プリントが遠くへ行っちゃうよ」

綾香が健介を急かす。その表情が、何とも言えないもので、なんだか見ていると和んでしまうようなものだ。

「はいはい。分かったから走るなって。転ぶぞー」

綾香は大丈夫ー、と言うや否や、再び走り出した。その度に、彼女の腰まである長い黒髪が大きく靡いている。

健介はそんな綾香を見て思わず微笑んだ。

彼女の笑顔が愛しい。それ以前に、綾香自体が愛しい。それが、健介の隠す事の出来ない本当の気持ちだった。その気持ち、彼の表情からも露となっている。

誰もいないグラウンドを、二人は横断する。一刻も早くプリントを見つけないと。その気持ち、二人の気持ちを急かす。

そして、グラウンドに無い事を確認すると、二人は校門を飛び出した。

それと同時に、健介は足を踏み入れてしまった。後戻りできない、運命の扉へと。

## 第五章

健介と綾香は校門を出て、間もなく近くにある横断歩道に差し掛かるうとしていた。

後少しで授業が始まる。もしも彼らが授業が始まったにも関わらず、校外へと出て行つたとばれてしまえば、教師達からのお怒りを逃れる事は絶対に出来ない。

よって、一刻も早くプリントを見つけなければならぬ。そんな気持ちで二人を焦らせる。

それは綾香の表情にしっかりと表れていて、困っているのが丸分かりだった。どうしよう、と何度も呟く声が聞こえてくる。

健介は、そんな綾香に何を言えればいいのか分からず、ただ黙々とプリントを探していた。

とうとう二人の間には沈黙が生まれ、聞こえるのは車輛の行き交う騒音と、二人が歩く度に擦れる、靴とアスファルトの音だけだった。

健介は道端の草むらを掻き分け、綾香は道路を見渡す。心無いポイ捨てで溜まったのであるう、大量の空き缶やタバコの吸殻などを次々と見つけるものの、肝心なプリントを見つける事が出来ない。

「……なあ綾香。今更だけどさ、プリントぐらい……先生にも一枚印刷してもらった？」

健介は苦笑しながら、少し申し訳無さそうに言う。気付くのが遅かった事に、少し責任を感じている様子。怒られる感じているのか、健介は綾香を直視できない。

しかし綾香からは怒りの欠片も感じられず、それどころか彼女の表情に明るさが宿る。

「そっかあ。そういえばそだね。あはは。健介ってば、ナイスアイ

ディア」

そう言って綾香は、自分の身長より頭一個分高いところにある、健介の頭を優しく撫でる。彼女の柔らかい手が、何度も何度も健介の髪に触れる。

すると、健介の頬は見る見るうちに朱に染まっていく。

「ば、ばか。何してるんだよ！」

「はいはい。恥ずかしがなくなつていいよー」

健介は必死に抵抗し、彼女の手を振り払おうとするものの、綾香はその手を退けようとはしない。それに、何だかんだ言っているものの、健介の表情は朧かに嬉しそうに見えた。

そんな時、綾香はあるものを発見した。

横断歩道を渡った先にある電柱。その麓に、紙があつた。そしてそれが飛んでいったあのプリントなのだと気付くまでに、あまり時間はいかなかった。

「健介！ あつたよ。プリントが見つかったよ！」

「え？ 本当かよ？」

嬉しそうに騒ぐ綾香の声を聞きつけて、健介は綾香の指差す方を見る。そしてその存在に、健介も気がついた。

「私、取って来るねー」

そう言つと、綾香は長い髪を靡かせて走り出した。青信号の横断歩道に向かつてまっしぐら、といった感じだった。

嬉しそうな彼女の後ろ姿を、健介も追いかけようとした。

するとその瞬間、健介の右目に突如激痛が走る。夢だと感じていたあの痛みが、健介に猛威を振るう。凄まじい痛みของあまりに、健介はその場に膝をついてしゃがみ込んだ。右目を押さえ、苦しそうにもがく。そんな彼の額を、脂汗が流れる。

「く……そつ。何でまた……」

痛みのあまりに、その場から立ち上がる事も出来ない。その上、

急に全身から力が抜けてゆく。そして彼の全身に、凄まじい重力が襲い掛かる。あまりの重さに、呼吸までもが辛くなり、彼の吐息が荒々しくなるのが分かる。

そんな時に、それは聞こえた。

「駄目だよ。君に死なれちゃ、困るんだよね」

あの声が、再び聞こえた。健介は立ち上がれないまま、辺りを見回す。しかし辺りには誰もいない。それよりも、彼は先程の言葉が気になっていた。死なれたら困る？ 一体どういう事なのだろうか。それではまるで、行けば死ぬみたい……。

その思考が生まれた瞬間、彼の背に寒気が走る。悪い予感がする。まさか、と健介は青白い顔で呟く。そして、走り行く綾香の方へと振り向く。そして全身の力を振り絞って、声を上げる。喉が哽れようが哽れまいが関係ない。

「綾香あ！ 行くんじゃ……」

健介の声は、呆気無く遮られた。耳障りな、道路と車輪が擦れて起きるブレーキ音。その音を前にして、彼の声は全く意味も無かった。

そしてその音が鳴り響く瞬間 綾香と大型車輛が激突した。あまりのスピードで、綾香の体は軽々と宙へと吹き飛ばされる。彼女の体は、赤い液体と共に宙を舞う。そして夥しい量のそれは、一瞬で辺りに飛び散った。

そして、彼女の体は固いアスファルトの上へと叩きつけられる。鈍く不気味な音が、健介の下まで聞こえた。

健介は思わず言葉を失った。目の前で起きた、信じられない光景。綾香が交通事故に合った？ 赤い血を流して倒れている？ そんな……嘘だ。

健介の震え切った声が粕かに漏れた。衝突した車の窓から若い男

性が顔を出し、綾香の方を見た瞬間、小さな悲鳴を上げ、怯えた様子で車で逃走した。健介が追いかけてしようとしたが、そんな気力が残っているはずもない。

そして次の瞬間、健介の体に再び力が宿る。健介はふらふら歩きながら、血を流し、うつ伏せに倒れている綾香の元へと向かう。

朝まで白かった彼女のセーラー服は赤黒く染まっている。彼女の綺麗だった黒髪にも、夥しい量の血がついている。綾香は静かにそこで倒れていた。

辺りで騒いでいる音がする。悲鳴の声、何があつたの、とざわめく声、助けを呼ぶ声。色々な声が混ざり、気分が悪くなりそうなくらい、それははっきりと健介に聞こえていた。

健介は体を震わしながら、腰を下ろして、彼女の血塗れの体を抱え、上向きにする。するとそこには口から血を流し、今にも閉じてしまいそうな目で、健介を見つめている。荒い呼吸。その音がはっきりと聞こえる。

そして、意識が朦朧とする中、綾香の脳内に少年のあの言葉が蘇った。

バイバイ。……永遠にね。

「……こういう……事だったん……だね」

綾香は粕かに口を動かし、呟いた。そんな様子を、健介は涙目で見つめていた。潤んだその瞳に、彼女の傷だらけの姿が映る。

「綾香……。喋るんじゃない。待ってろ。今……今、救急車を呼んでくるからな」

そう言つて健介はその場を、震える足で離れようとする。

しかし次の瞬間。健介の服の袖を、震える赤い小さな指先がしっかりと掴んだ。

「綾香！ 離してくれ！ 早くしないと、お前……」

段々と彼の声に熱が籠る。真っ赤な顔で必死に叫ぶ。それでも、彼女は決して離そうとしない。

そしてこの時、綾香はもう一つ言葉を思い出していた。

だからね、お兄さんに気持ち。早いとこ伝えた方がいいよ。

その言葉が頭を過ぎると同時に、綾香は粕かに微笑んだ。辛いくせに、必死で微笑む。そんな儚い笑顔が、逆に健介の心の奥底を締め付ける。

「健介……。多分……。ね。もう……。言えないから……。言つよ?」

「綾香! 俺の袖を離してくれ! 頼むから! 綾香!」

叫ぶ健介の右目から涙が溢れ出る。健介は涙を拭い、右目を閉じる。

すると、綾香の胸元に蒼い数字が浮かぶのがはっきりと見えた。その数字の横には秒という単位があった。そしてその数字は、段々と小さくなってゆく。

3 0 ..... 2 9 ..... 2 8 .....

「綾香、喋るんじゃ.....」

1 0 ..... 9 ..... 8 .....

「健介、私はあなたの事.....」

3 ..... 2 ..... 1 .....

「好き.....」

..... 0



数字はゼロになった。蒼い数字は徐々に消えていく。

それと同時に、綾香は静かに目を閉じた。彼女の閉じた目から、涙が零れ落ちる。全身から力が抜けるのが、彼には分かった。分かりたくなかった、認めたくなかった現実を、認めてしまわないといけないのかもしれない。

健介は震えながら、綾香の血が付着して赤くなった右手で、綾香の細く白い右手の脈を測ってみる。脈が動いていれば、綾香は生きている。死んでなんか無い。頼む。動いていてくれ。

彼は僅かな希望にすべてをかけた。

しかし、彼女の脈は完全に停止しており、僅かな少年の希望すら、完全に否定された。哀しみが、一気に健介の心を深く抉る。

「綾香あああ！」

彼は叫んだ。その悲痛の叫びは長く、大きく響き渡った。健介は涙を流しながら、血だらけの彼女を抱きしめた。赤い血が彼の服にべったりと付く。しかし、健介は動揺しない。

「どうして……こんな事に……」

そんな事を言っていると、健介は思い出した。家の中で彼女の胸に浮び上がっていた、赤い数字は「1時間」となっていた。そして、綾香の心臓が止まったのがあれから丁度一時間後。

健介は言葉を失った。この奇妙なほど一致する偶然。いや、本当に偶然なのか？ 何か関係あるんじゃないのか？

心の奥で健介は問い掛ける。しかし、誰も答えるはずが無い。

そんな時、あの忌々しい声が聞こえた。

「関係あるよ」

子供のような幼い声が、健介の頭を過ぎった。



## 第五章（後書き）

やっとここまで更新できました。

ここからが、この物語の本当の幕開けと言っても過言ではありません。

ここから、健介は辛い運命を辿らなければなりません。これからも、よろしく願います。

## 第六章

突然、声が健介の頭を過ぎった。

その声に健介は反応する。ずっと健介に話し掛けてくるあの声。それと同じ声が、今彼の頭に何度も反響している。

健介は今までと同じ様に辺りを見回す。家の中から人が健介達の方を見ている。そして赤い閃光を放つサイレン。純白の車が、彼らの近くで静止する。

そしてその中から男性達が降りてきた。慌しい様子で健介の下へと近寄り、健介が抱きかかえていて、血で染まったセーラー服を着ている綾香を、男性達は抱えて、担架に乗せようとする。自然と健介の手に力が籠る。

離したくない。ここで離せば、綾香が死んだことを認めてしまう。認めたくないのに、医者達に死んだと認められてしまう。健介の頭にそんな考えが浮かんだ。

「君、彼女を離しなさい。辛いのは分かるが……」

男性が一人、健介にそう囁いてきた。その声に健介は反応した。何が分かるだ。あんたなんか何が分かる？ 俺の何が分かるっていうんだよ！

健介のそんな気持ちが、徐々に込み上げて来た。健介の手が震える。怒りと哀しみが入り混じった気持ちが、彼の体を震わす。

「あんたなんか……一体何が分かるって」

健介の怒りが頂点に達し、鋭い目付きで隣で構えている男性を見て、その言葉を言い放とうとした。しかし、その言葉は途中で途切れた。

男性の隣に、子供が居た。漆黒のローブで細身を包んでいる。女性の様な長くて透き通った緑の髪をしている。見た感じは十歳程度

の子供。

しかし、何故か雰囲気が子供に感じられない。全身から溢れ出ている威圧感。それに耐え切れず、健介の手の力は一気に抜けた。健介の手から綾香の肩が離れていく。

それを見逃さず、男性は綾香の体を抱きかかえると、細っそりとしたその体を担架の上に静かに乗せる。担架の布の部分が、血で徐々に赤く染まっていく。

担架は早々と救急車の中に乗せ込まれ、車はサイレンを鳴らし、動き始めた。白い車はどんどん離れていき、もうすぐ車体が見えなくなる。そして、見えなくなつた。

人々がざわめく中、健介はただその場に座り込んでいた。赤く染まった制服。それを着たまま、動こうともせず、道路の真ん中で座り込んでいる。

意識を失っているんじゃない。その視線は、あるものに向けられていた。

先程突然現れた子供。それを未だに見つめている。どちらも動くとはしない。ただ見つめ合っている。子供の瞳は蒼く透き通っており、視線が冷たい。子供とは思えないほど、冷酷な感じを漂わせている。

ひたすら沈黙が続いた末、とうとうその沈黙は破られた。子供  
の笑い声によって。

その笑い声は高く、健介を嘲笑うかのようだ。その笑い声で、健介の目付きは変貌する。

「何がおかしいんだよ？」

つい、健介は口を開いた。健介の声は低く、怒りで満ちていた。その問いの答えが返ってくるまで、またしばらく沈黙が続いた。子供はただじつと健介を見つめている。

子供は微笑した。一端目を閉じ、再び目を開けた後、子供は喋り

だした。

「死生の魔眼はどう？　楽しいでしょ。君の彼女、死んじゃったね。あ、彼女じゃないか」

冗談を言った感じで、再び笑い出す。その笑い声が、何度も何度も健介の頭の中で響く。そして、健介は立ち上がった。

そして子供の顔面の横を彼の拳が過ぎる。風が起き、子供の髪が揺れる。

彼はコンクリートの壁を殴った。鈍い音が響き渡る。骨が折れたような音。彼の手からは多量の血が流れ出て、それがコンクリートの壁を流れる。

「不愉快なんだよ……。黙りやがれ」

怒りで満ち切ったその声は、子供の心を少し動かした。子供の眉が粕かに動く。

しかしそこでまた、子供は微笑した。不愉快なその声を聞き、健介は眉間にしわを寄せる。今度こそ殴ってやる。健介は再び血で赤くなった拳を振り上げる。

「随分と威勢が良いね、君。やっぱ死生の魔眼を君に授けて正解だったよ」

そんな言葉が、突然子供の口から言い放たれた。不思議なその言葉に、健介は耳を傾け、拳を止めた。

「話してあげるよ。死生の魔眼。君のその……。紫の瞳についてね」

そう言って、子供は微笑んだ。その微笑んだ顔は、少し綾香の微笑んだ顔と被る。その微笑を見た健介の心が、大きく揺れた。

もう流しきったはずの涙が、再び彼の瞳から流れ落ちた。

## 第七章

清潔な空気が漂う部屋の中の、丁度隅に位置するベッドの上に健介は横たわっている。

両目を見開いたまま、何か考えている様子も伺えず、ただぼーっと白い天井を眺めている。まるで魂が抜けてしまった抜け殻のようだ。

部屋に聞こえてくる様々な音。パタパタとスリッパで廊下をかける足音。女の人が、優しくご老人に話をかける声。先生早く来てください！ などと騒ぐ声など、様々な音声が部屋へと届き、そして響く。

ここは病院。病気を患ったり、怪我人が入院したりする、あの病院の一部屋だ。

そんな場所のベッドに、健介は横たわっている。健介の服装は、綾香の血が夥しく付着した制服ではなく、淡いブルーのパジャマへと着替えていて、病人といったような服装である。

そして健介がいる部屋の扉には、『浅野健介』と書かれたプレートが貼り付けられている。

そう。健介は入院したのだ。綾香が息を引き取ったあの日、彼は入院した。別に頭や体に傷や異常が無いにも拘らず、何故か病院の医師に直ちに入院です、と診断されている。

健介は相変わらずの様子で、天井をじっと眺めている。

そして、朧かに彼の唇は動いている。それも延々と、同じ動きばかり。それは機から見れば、非常に気味の悪い光景であろう。

その光景を、偶然彼の部屋の前を通った二人の、若い男性の医師

は見ていた。

そしてしゃれた眼鏡をかけた医師が話しかけた。

「……なあ、彼なんで入院してんだ？」

片方の髭が濃い医師は、少し溜息をついてあのさ、と呟く。

「彼さあ。他の体の何処にも異常がないというのに、両目がなあ……」

そう呟く髭の濃い医師の言葉を聞き、しゃれた眼鏡をかけた医師は、疑問があるような表情で話し掛ける。

「両目がどうしたんだよ？ 秀雄。何かあるのか？」

髭の濃い医者 秀雄は困った顔で話した。

「いや。それがさ。彼の両目さ、レントゲン撮ったとき、赤色と蒼色をしてたんだよ」

そう言つと、その場にしんと静寂が募る。

しばらくの間があつた後、しゃれた眼鏡をかけた医師は大笑いした。その顔に合わない下品な声を、広大に響かせる。

「お、お前馬鹿だろ。赤色や蒼色？ お前変なものでも食つたんじやないか？ それにそついや、大体何で交通事故に合つてない無傷の彼のレントゲンなんか撮つてんだよ？」

突然突きつけられた言葉に、秀雄は戸惑つた。そう。正しいのはしゃれた眼鏡をかけた医師の方である。何故無傷である健介のレントゲンを撮り、入院などと診察したのか。

秀雄は焦りながらも必死に答える。

「い、いやさ。何だか彼のレントゲン、撮らなきゃいけないような気がしてさ。そんで結果が結果だから、これは何か異常があると思つて、入院してもらつたんだよ」

秀雄はそう必死に答えた。しかし、答えれば答えるほど、彼の動



機が意味不明なものへとなっていく。そして眼鏡の医者は呆れきっていた。

「あのさ。お前がやった事は理屈の通ってない意味不明な事だ。お前、そんな冗談の為に彼を入院させてどうする。それともなんだ？ 嘘で新しい病気の発見です、とでも騒いで病院を驚かすつもりか？」

そう言っ、て、眼鏡の医者は秀雄の言葉を信じようとしな。い。それどころか冗談を言う為に、健介を入院させたなどと言っている。

この言葉にさすがの秀雄も切れ、一気に叫ぼうとする。

「おい、お前」

「はいそこまで。分かった分かった。まあ、笑わせてもらったよ。

秀雄にしては上出来な冗談だな。わははは！」

そう言っ、て秀雄の言葉を遮り、大声で笑いながらその場をゆっくりと去って行った。

そしてその場に、秀雄は一人残っていた。

部屋のベッドに横たわる少年の姿を見ながら、秀雄は呟いた。

「誰も信じなくなっ、た。いいさ。俺が……必ず謎を明かしてやる。あの子の両目の謎を……」

秀雄は、自分が見た赤い目と蒼い目を事実だと信じ、強く決心した。

そしてその頃、健介はあの事故の事を思い出していた。

そして 奈落と名乗った子供の事を。

## 第八章

「死生の魔眼。それは僕が君にあげたものだよ」

綾香が交通事故に巻き込まれて死んでしまったあの日、緑髪の子供は、平然とした表情でそんな言葉を発した。

「そしてそれは　人の生と死が見える」

子供の言葉を聞いた健介は、目を丸くして子供を見続けていた。

「……生と死が……見える……？」

健介は道路の真ん中で座り込んだまま、掠れた声を出した。泣いて叫んで喚いて。彼の喉はとづくに嚙れていた。そんな声で、緑髪の子供に話し掛ける。

「君が朝見た赤の数字。あれはその人が後何時間。または何分で死ぬか。その人が死ぬまでの時間。それが赤の数字」

緑髪の子供は普通の表情で語る。人の死というものを平気で。

「そして今さつき君が見た蒼の数字。あれは残りの生の時間。徐々に数字は小さくなり、完全に消えるとその人は死んだっていう事。意味分かる？」

分かりたくない事だが、詳しすぎる説明のせいで、理解できてしまう。健介の体が朊かに震えた。

緑髪の子供は一端間を置いた後、もう一度喋りだした。

「数字はその右目　死生の魔眼だけで人を見た時に見えるんだ。他人の残りの人生が把握できるなんて楽しいでしょ？」

子供はニコニコと笑みを浮かべている。実に子供らしい笑顔だ。しかし、神経はいかれている。人の死をゲームみたいに扱う子供。不気味で仕方が無い。

「……さて、ある程度の説明はこんだけかな。また詳しい利用方法とかは、改めて説明するよ　じゃあね。大切な人を失った孤独なお兄さん」

そう言って子供は健介に手を振る。その時、突然子供は忘れてた、と言った。

「自己紹介がまだだったね。僕の名前は奈落。覚えといてね。それじゃ」

奈落と名乗る子供は小さく笑い声を上げた後、子供の姿は一瞬で消え去った。まるで空気に溶けたかのようにだった。

そこに残ったのは、ただ孤独に座り込んで居る健介のみになった。辺りで騒いでいた人達は妙な目で健介を見る。何処からかあの子、誰と話していたの？ という声が聞こえる。その声に答えるように、他の誰かが現実逃避ってやつじゃないか？ そりゃ辛くもなるだろう。こんな哀れんだ声が聞こえて来る。

フザケルナ……アンタラナンカニナニガワカル。

健介は壊れたように、そんな言葉を小さく繰り返す。体が大きく震える。健介は自分の制服に染み付いた、夥しい量の血を手で触る。その血は手に付かなかった。血は既に固まっていた。

綾香はとつくに死んでいる。それを認めざるを得ない事実で、健介は再び嘆いた。

「綾香……俺、どうすれば良いんだよ……」

健介は呟いた後、その場に静かに倒れ込んだ。頬を流れる涙が、アスファルトの上で乾いている血に直撃した。血は涙と混ざり、再び赤い雫となった。

そうして健介は今、この病院にいる。

どうやら町の人が健介の事を病院へ連絡したらしく、道路の真ん中で倒れた健介を、救急車が直ちに病院へ運んだのだった。

健介は呆けた様子で白く膨張したような布団を被り、ベッドの上に寝ている。何もする気がしない、という脱力感が彼の光景からう

かがえる。誰もが余程精神的ダメージが大きかったんだろう。可愛そうに、と口ずさむ。

健介の様子が変化する事は、殆ど無かった。入院直後の日、母親や彼の友人がお見舞いに来たと言うのに、その様子にはば変化は見れなかった。変化が見られたといっても、ほんの少し笑顔を浮かべた位だった。それに、その笑顔ですら作り笑いなのがすぐ分かるほど、彼の表情は固く、冷たいものとなっていた。

そんな健介の姿を見て、ほっとけなくなったのか、秀雄は一度深く呼吸すると、健介の病室へと足を踏み入れた。

「やあ。どうだい、気分は？」

彼の気分が良くないのは分かっているのを承知で、秀雄はそう言った。分かっているても、それぐらいしか、彼にいう言葉が無かったに違いない。

秀雄は精一杯健介に話しかけた。しかし、予想通り、健介は一言も喋らなかつた。ただじっと、黒くて冷たい瞳が秀雄を見つめた。重苦しい空気が秀雄を襲う。医者となれば、なんでも重く苦しい状況を味わって来たに違いない。しかし、医者である秀雄すらまだ味わった事の無い様な重みが続いている。

重く、辛い空気が一秒ごとに濃くなる。病室を漂うこの緊張感は何よりも気まずいものとなつて秀雄に降りかかる。秀雄はこの空気の重さで何も出来ず、健介の前でただじっと立ち尽くしている。時計の秒針の動く音が、更にこの雰囲気重くする。

あまりの気まずさに耐え兼ねなくて、秀雄は諦めて病室から逃げるように立ち去ろうとする。自分でも恥ずかしい、と思っていたその時。健介の唇は朧かに動いた。そして言葉を発した。

「……死んじまうぞ」

「……え？ なんだって？」

あまりの小さい呟きに、秀雄はもう一度聞きなおす。

「あんたの隣にいたあの眼鏡の医者。……もうすぐ死んじまうぞ」  
さっきの声の何十倍も大きな声で、健介は秀雄を見ていった。そしてあまりに意外な言葉に、秀雄は自分の耳を疑った。もうすぐあいつが死ぬ？ そんな馬鹿な。  
「いや。あのね君。冗談はもつとマシな……」

ガッシャアアン！

秀雄の言葉が終わりかける寸前に、耳障りな雑音が廊下側に響いた。

「な、何の音だこれは？」

あまりの大きな音で、さすがに秀雄も驚き、健介の部屋から飛び出し、廊下の方を見る。

そして秀雄は自身の目を疑った。

そこには大量の夥しい血を垂らし、倒れ込んだ医者がいた。そしてその医者 of 近くに、赤く染まった大量の刃類や手術道具が散乱していた。

そしてその近くには、先程の医者がかけていた眼鏡があり、血を浴びて赤く染まっている。

「な……。これは……」

「ほら。俺の予言、当たってただろ」

その言葉が聞こえたと同時に、秀雄は健介の方を振り向いた。

ベッドの上に健介は、不気味な笑みを浮かべて座り込んでいた。

「君は……一体……？」

秀雄の驚いた声が聞こえた瞬間、患者の叫び声のようなものが病院に響き渡った。

## 第九章

結局、あの医者は死んだ。

どうやら原因は多量出血らしく、近くに散乱していた鋭い刃物類。あれが容赦なく医者の全身を深く切りつけていたせいらしい。

あんな事故が起きた原因は、どうやら手術用のナイフやらを台に乗せて、急いで走っていたナースと衝突し、その勢いで台に乗っていたナイフが飛び散り、そのまま医者の体を目掛けて勢い良く飛んで行った、という事だった。

ナースと医者が衝突した場所は、以前から誰が来てるのか分かりづらいつと苦情の跳んできていた、直角に曲がる四つ角だった。天井には鏡のようなものも無く、もしもゆつたりと歩いているお年寄りの方でも居たらどうするつもりだろう。ほぼ確実に、遅かれ早かれ事故が起きたはずだ。今回のこの事件のように。

病院側も、今回の事を期に、何か対応をするだろう。そうではなくては困る。

そんな事を言いながら、秀雄はベッドの横にあった、見舞い客のために置いてある椅子を引っ張り出し、ぎつと音を立てて座った。丁度健介と会話するのに、丁度良い角度に。

健介は健介で、ベッドにじつと座り込んだ状態で、病室の小さな窓から見る事のできる、限られた風景をじつと。……正確には冷たい瞳で、意識が朦朧としているような状況。

秀雄は自分の頭を掻いた後、自分の両手を膝の上辺りに拳を握り、手を置いた。たった今から改まってお話をします、とわざわざ説明するような感じだった。

それでも健介は変化無し。ただじつと外を見る健介の姿をじつと眺め、一度顔を下に俯けた。しかし、首を横に振って、再び健介を

見る。

「しょ、正直に言おう。君は一体、何者なんだ？」

秀雄は医者对患者に対して言うのはおかしい言葉を発した。それはそうだ。患者にあなたは何者ですか、なんて失礼な言葉を言うなんて、常識では考えられない。

でも今は、そんな事に構ってられない。そんな思いすら感じさせる鋭く、真剣な眼光が秀雄からは伺える。

そんな真剣な思いを踏みにじるかのごとく、健介は不気味で冷めた笑い声をあげる。それは病室全体に響き渡るような笑い声で、秀雄の頭を強烈に刺激される。少し秀雄は頭に來たのか、熱の籠った声で健介に問う。

「一体、何がおかしい」

「それはこつちが知りたいさ！」

秀雄がそこまで話すと、健介は秀雄の声を振り払うような声で叫んだ。突如放たれた声は、秀雄の予想を越える思いを感じさせた。必死に、泣きそうなのを堪えて、鋭い目付きで秀雄を睨みつける。そんな健介に、秀雄は圧倒され、思わず言葉を失った。

「いつものように！いつものように綾香は俺の家まで来た！満面の笑顔でな。いつものように馬鹿とか言い合いながら！そうさ。いつも通りだったんだよ。別に俺もそれ以上も、それ以下も望んでなかったんだよ。それが……それがっ！」

健介の熱の籠ったその声は、やがて悲痛の声となって秀雄の耳に届く。思わず秀雄は冷や汗を頬にかきながら、背筋をピンと伸ばす。「それが……最後だったんだ。ただ通学路を一緒に歩いて、学校まで行ってただけなんだ。なのに……なのに……！」

段々と健介の言葉は擦れていくような声のせいで、小さく何かを言っている程度にしか聞こえない程度になっていた。

そんな彼を見ているのが悔しく、悲しくなったのか。秀雄は健介に近付いた。

彼の肩に自分の手をポンと置き、健介を見つめる。

「健介君、辛いのは分かった。だから、もうそれいじょ……」

「あんななかに何が分かんだよ！」

また健介は悲痛の叫びを上げた。今にも秀雄に襲い付いてしまいそうなその瞳は、先程までの冷たい瞳と違って、温かさを感じさせるようだった。そして秀雄は、初めて健介の「人間」の瞳を見た気がした。今までの、人形同然のような冷たい瞳。その瞳に、人間らしい感情が宿った彼の瞳を、秀雄は初めて見た。

「あんたも……あいつらと所詮同じなんだよ」

健介はそう言って頭にあの光景を思い出す。健介の周りに突っ立っていて、かわいそうに。何で交通事故になんか。彼相当ショックだろうね。現実逃避しても仕方ないだろ。

そう永遠と同じような哀れみの声を発していた奴ら。それと同じ。健介はそう感じていた。

「あんたもあいつらと一緒になんだよ！ 人が大切なものを失う場面がそんなに楽しいか？ 慰めてやって、同情してやって、感謝してもらいたいのかよ！ 私は良い人だって、思わせたいのかよ？ 何一つ失った事が無いくせに、適当な事言いまわんじゃねえ！」

ぱあん！



そんな軽快な音がすると同時に、秀雄の手は健介の頬を勢い良く過ぎていった。健介の頬は少しずつ赤く染まり、火照ったようになった。

秀雄はただ真剣な瞳で健介を見る。そんな秀雄が頭に來たのか、今すぐにでも飛びつきそうな勢いである。

「何だ？ 患者に怒鳴られたからって、暴力ふるうのか。最低な医者だな、あんた」

「……………」

「まあなんだ。凶星だったから頭に來たのか。あんた、ふざけんじや……………」

「ふざけてるのはお前だろ！」

秀雄が突如放った叫びで、その場の空気はしんと静まった。ほんの少しの間、静寂が続く。

医者が患者に取るのはおかしい態度を、秀雄は連続で取っている。健介がその気になって病院側に訴えれば、秀雄はとんでもない目にあうに違いない。間違はなく、患者に暴力行為などと新聞に撮り上げられ、仕事を確実にクビになるだろう。

しかし、健介はそんな気はサラサラ無かった。  
むしろ、この瞬間が秀雄に対する態度が変化する原因だったのだらう。

「な、何だよ……………」

健介は少し怒鳴られて、驚いた様子で問い掛ける。すると秀雄は先程と、何かが違う雰囲気を漂わせて、呟いた。

「自分だけが不幸な奴だと思っただけ。俺だって……………人が死ぬ光景を何度も見てるんだ。それも目の前だな。人の命を、人生を背負って生きて……………それが医者なんだよ」

その言葉が、健介が秀雄に対する思いを大きく変えた。

そして、秀雄は静かに語りだした。

窓から差し込む夕日は、二人をただ明るく照らした。  
そしてこの時点から、悲劇の齒車は更に加速し始める。

## 第十章

「それじゃあ」

夕日の光で赤く染まる静かな病室に、秀雄の声が静かに響く。白衣を着た秀雄を見ると、やっぱり医者に違いは無いのだが、もう既に健介が持つ医者 of 想像図と秀雄とは、恐ろしいほどかけ離れていた。

「……健介君、本当にすまない。私は医者という立場で、君は患者だというのに……。患者にとるにはおかしい態度ばかり……。本当にすまなかった」

秀雄は申し訳無さそうな表情で、健介に謝罪する。

しかし、秀雄は健介と目をあわさず、そう言った後にノブに手を伸ばし、静かに病室を後にした。

そしてしばらくして、扉の閉まる音が病室に響いた。

「……はあー……」

健介は、今までどのくらい重苦しい雰囲気耐えていたんだ？と思うほど大きくて、長いため息を付いた。そして白く、膨張したように見えるベッドに倒れた。ぼふっ、と音をたて、布団が健介の傷ついた心や体を優しく包み込んだ。

健介は、秀雄の言った言葉。そして自分の頬に走った衝撃を思い出していた。

ふざけてるのはお前だろ！

「……ははっ。何だか……綾香がいるみたいだ」

性別も存在的にも綾香とは全く違う。ただ、健介は秀雄のおせっかいなあの性格が、綾香にそっくりだと感じていた。ほっというおけばいいのに、気になって仕方がない彼女の性格に。

健介は嬉しくもないのに微笑する。そして秀雄にしばかれた頬を摩る。

時波秀雄。あいつは、他の奴らとは違うかもしれない。哀れみばかりを口にする、奴らとは。

「やあ、久しぶり。元気かな？」

突然静かだった病室に声が響く。何度も聞いた、あの幼い声。

「……奈落なのか？」

健介が誰もいない病室で、一人そう喋ると、そのとーり、と甲高く、元氣な声が聞こえてくる。そしてそれと同時に、空気中から突然奈落は姿を現した。

まるで今まで透明だったのか、とも思ってしまうほど、一瞬で音もなく彼は姿を現した。そしてにこやかに健介を見る。

「もう僕の名前、覚えてくれたんだね。光栄だなあ。……どう？」

僕の名前。いかにも、ってカンジでしょー？」

そう言っけタケタと笑い出す。何も知らない人から見れば、服装と髪の色。そして名前が少し変わっているだけの、普通の子供にしか見えないだろう。事実、健介にも奈落はただの子供と変わりないように見えた。何も言わなければ。

「さて、健介君。……あの医者。信じちゃ駄目だよ？」

彼が放った言葉の後半部分から、重苦しい威圧感が降りかかる。

それは健介の心臓を一気に圧迫する。いつになく真剣な表情を見せる奈落。健介はただ。

「あ、ああ……」

としか言えなかった。何故秀雄を信じてはいけないのか。元から信じる気も、心を許した気も無いが、それは健介の心残りだった。

「……知りたい？」

その直後。ドクン、と健介の心は大きく揺れた。何故俺の考えが？ まさか考えが読まれたのか？ そんな思いが交差する中、健介

の前に突っ立っている奈落を、ただただ見つめていた。

「だって君、分かりやすいんだもん。気になってるって、顔に書いてるよ」

そう言っただけケラケラと笑う。一瞬、陽気な奈落を見ると、健介は奈落という存在が分からなくなる。どれが本当の奈落の姿なのか、と。

あれは、悲劇をもたらした張本人であり、憎むべき相手。心を許してはいけない。

そう心では意識しているのに、無邪気な子供らしい一面を見ていると、健介の意識は一瞬で鈍ってしまう。

たった今でも、奈落は子供らしい姿を見せている。

健介が倒れているベッドの横に位置する机。そこには皿の上りんごがある。彼の母親の見舞い品で、りんごを持ってきて切っていた。

そして偶然それを発見した奈落は、目を見違えるほど輝かせていた。

「お兄さん、これ貰うよー」

うんとも言っていないのに、奈落はそう言う一口サイズにカットされたりんごを口に運ぶ。子供らしい声で、おいしいと素直に感想を述べた。

何が普通の子供と違うんだ？　と思ってしまうたら、そこで負けだ。後から奈落の威圧感に耐える事が出来なくなってしまう。

そして健介は一瞬奈落から目を逸らす。奈落に問い掛ける。

「奈落……何で、信じちゃ……駄目なんだ？」

こんな短い言葉を発するだけなのに、健介の足や腕は小刻みに震えていた。なんて情けないんだ。そんな考えが浮かぶ中、奈落はうーん、と唸っていた。

「何で……ねえ。あいつ、僕が君にあげた死生の魔眼の事について、若干気付いてるんだよ」

その言葉を聞いて、健介は当たり前だろ、と言いたそうな顔をする。すると奈落は健介の顔を見て、健介の考えを読む。

「俺がそれらしいことを言ってるから気付かれて当たり前だって？ いいや。そんなはずは無いよ。何故なら、君は医者が死ぬことを予言したけれど、魔眼については一言も喋っていない。奴はもう既に、君のその両目の違和感に気付いている。ほんの一瞬、レントゲン写真に写っちゃったからね。……魔眼に潜むモノが」

所々意味の不明な言葉を発する奈落をただ、呆然と眺めるしか健介には出来なかった。

そしてそんな時、この病室に耳障りな旋律が流れてきた。

夕暮れ。そして耳障りな旋律。この旋律をきっかけに、二人は出合う事になる。

そして悲劇という戯曲は、更に激しい音を奏で始める。

## 第十章（後書き）

長いこと更新できず、すみませんでした。テストが近いなどの関係で、少し遅れてしまいました。

これからも数日の間遅れてしまう可能性がありますが、よろしく願います。

## 第十一章

「うーん。……どうしようかな」

悩ましげな表情を浮かべ、腕を組んだ健介がそこにいた。そこ、というのはある病室の前だった。「咲野華綾」と書かれたプレートが、病室とこの廊下を繋ぐ扉に貼られていた。名前から察するに、当然女の子のようで、この向こうに自分と同じ年ぐらいの女の子がいる、と思うと健介は少し恥ずかしい気がしたらしい。頬を薄っすらと朱に染め、頭を掻いた。

そしてその度に、目の前にある扉を見ては目を逸らし、の繰り返しだった。

全ては今から三十分程前に遡る。

健介は入院し、徐々に慣れつつある病室で奈落と話を済ました後、息抜きのつもりで読書をしていた。別に読書が好きなわけでは無い。それにどちらかといえば、健介は読書が嫌いだった。彼は体を動かす方が好きらしく、彼にとっては高校にある「朝の読書時間」というのが苦痛でたまらなかった。

朝の読書週間というのは、校長が自分の趣味に合わせて設けた時間らしい。自分は読書が好きだから生徒にも好きになってもらいたい、などという身勝手な考えで出来たようだ。

健介からすれば、それは本当に苦痛の時間に違い無かった。

同クラスの綾香や遼も自分の本を持ってきて、楽しそうに読書を時間を満喫していたが、健介はそうは行かない。毎日続くその時間は、大嫌いの一言では片付けられないものとなっている。

そんな訳もあり、自ら進んで読書などするような健介ではなかったが、時間が有り余っているその時は、仕方がない事だった。見舞いに来た母も既に帰っている。テレビを見ようにも、この時間は別



に見たい番組も無い。暇つぶしにはなるかもしれないが、わざわざ見たい番組も無いのに、テレビがある一階のロビーまで行くのは面倒すぎる。

よって、退屈な彼の心を埋めるものは、読書しかなかったのだ。

健介は仕方ないか、などと呟いた後、健介は母が置いていった雑誌に手を伸ばす。せめて漫画ぐらいあれば良いや。そんな事を考えながら、健介は雑誌のページを捲ろうとする。

そんな時に、それは聞こえた。

まるで黒板を鋭い爪で引掻いたかのような高く、耳障りな音。それが聞こえるだけで、彼の全身に寒気が走った。半袖のパジャマから覗かせる、決して筋肉質とは言えない腕に、一瞬にして鳥肌が立った。

「な、何だよこれ！」

それが彼の第一声だった。両手で両耳を抑え、最低限の被害に押さえようとする。しかし、微かな隙間からもそれは攻め込んでくる。耳を通じて、脳内に音が走り刺激を与える。たった一度の音ならまだしも、それは何度も何度も聞こえてくる。そしてそれは不思議な旋律を奏でていた。

たまらなくなった健介はナースコールへと手を伸ばす。看護婦に言おう。そして看護婦に助けてもらおう。健介の表情は凄まじい悲痛を物語っている。さらに目は微かに潤んでいた。

後少しでナースコールに届く。そんな時に、扉が開いた。そしてそこから看護婦がやって来た。これぞまさに白衣の天使だ、と感激しながら、健介は看護婦に話し掛ける。

「看護婦さん。これ何なんですか？ この高い音。すごく耳障りなんです……」

「これ？ これはね、バイオリンの音よ」

白衣の天使の名に相応しい優しい声が返ってきた。全く予想外の返答で。

健介の全身から、一気に気が抜けた。バイオリン……。これがあのバイオリン？

バイオリンを健介は思い浮かべてみた。透き通った、大らかに響き渡る美しい音色だったはず。そう彼の記憶に刻まれていたはずだった。

だからこそ、看護婦の返答には驚くしかなかった。恐らく自分の顔は今、ものすごく引きつっているであろうと思った。健介は驚きながらも、看護婦に再び問う。

「バイオリンですか。でも……なんでこんな音何ですか？」

「何でこんな音なのか、というのは答え難いけど、これは華綾ちゃんが演奏してるものよ。……あ、華綾ちゃんは健介君と同じ年くらいの患者だよー」

優しくて甘い声が健介に詳しく説明する。華綾。どうやらその女の子が、この悪魔の音色を奏でさせている張本人らしい。しかも、自分と同じ年くらい。

それを聞いた直後、彼の意味は一つに定まった。

そして時は今に戻る。

自分がこの張本人のところへ行って注意しなければ。それが健介の意思だった。

何故看護婦に注意してもらう、という発想が出なかったのかは理解できないが、既に健介は実行に移ろうとしていた。だが、いざその部屋の前に来てみると、緊張する所じゃなかった。忙しく彼の脈は拍動する。心拍数上昇。体温上昇。そんな異常が彼に襲い掛かる。

最近やつとお前らしい表情するになった。健介のお見舞いに来る人は、必ずそう健介に告げて帰ってゆく。もつと他に言うことは無いのか、と健介はいつも考えながらも、健介はお見舞いに来てくれた人を、手を振って丁寧に見送っている。

やっと少し、「人間」らしい表情を取り戻した健介。そんな彼を、また違う意味で厄介な悪夢が、彼を度々襲っている。

そして健介は、再び顔を顰めた。はあ、とため息を付いて壁にもたれかかる。

「また、かよお……」

健介は非常に悔しそうな声で呟く。小さく吼えながら、自分の頭を掻き回す。とても精神的に疲れた様子が、彼の姿を見ていると伺える。

病室とこの廊下を繋ぐ一つの木製の扉。その扉を通じて、室内から旋律が聞こえてくる。丁度三十分程前に健介の耳へと襲い掛かったあの音だった。本来のあの音がどうなればこうなるのか、健介は華綾というその少女に問い掛けたかった。

「くわああ！ もう駄目だ！ 無理。この音絶対無理！」

健介は両耳を防いでいたが、それでも僅かな隙間から入り込む濁音が、健介の耳を、鼓膜を強く刺激する。再び彼の腕には鳥肌が立っている。健介は、何で周りの患者は注意とかしないんだ？ どうして気にせずにいられるんだ？ と平気で辺りを歩く患者や看護婦に叫びたくて仕方がない様子。

「くそつ。ホント、どうしたもんだらう。いきなり病室に乗り込んで、耳障りだからやめろ！ だなんて言える義理、俺には無いし。っていうかそんな事言った途端、ナースコールされて俺、何か言われちゃうよな」

不安がどんどんと健介の心に降り積もる。健介の心の中では恐らく今頃、大雪注意報でも発令されている頃に違いない。「不安」という雪がどんどん、健介の意識を氷結させてゆく。どうしよう。看護婦に言うか？ いやいや。それは言っちゃ駄目……ってあれ？ 看護婦に言うのって、駄目なのか？ ……駄目だっけ？

ああ、駄目なのか。うん。そうだ。駄目だよな。

勝手に健介の思考内から、看護婦に言っただけで忠告してもらおう、とい

う発想は除外される。それが一番良い発想だというのに、健介の中では、それはどうやらしてはいけない事になってしまった様子。

「ううーどうしよう……ん？」

そんな時に、健介は背中に向けられる鋭い視線を感じ取った。変な目で見える患者。ひそひそと会話をする看護婦。ああそうか。どうやら俺を変な奴だと勘違いしてるようだ。

あはは、と軽く健介は考える。しかしそれが重要な事に今頃気がつく。

病室の前に、かれこれ二十分以上突っ立っている自分。周りから見れば、変質者にも見えかねない。そう思われても仕方の無い行動を、先ほどから十二分にしている。突然喚いたり、一人で勝手に納得したり。変質者に思われて当然の行動だ。

「やばい。このままこの場所を逃走したら、逆に煽ってしまいう気が……」

そうだ。ここで逃げたら、周りからの視線が気になり、実行に移せなかった変質者。……的な俺の人物像が出来上がってしまう。

しかしそれは断じて否。俺にそんなやらしい考えなど微塵も無い。

健介はそれを証明するため、勇気を振り絞ってノブに手を掛ける。そしてそんな時、更なる考えが頭に浮かぶ。

待てよ。ここで俺が部屋に入っても、逆に変な目で見られるんじゃないのか？ 遂に行動を起こしてしまった変質者、の人物像が出来ちゃうんじゃない……。

しかしその考えも意味無く、健介の体はもう既に実行に移っていた。ノブを回し、扉を前に押し開ける。そして、健介はミスを犯した。

ノックもせず、無断で室内へと突撃してしまったのだ。

音を立てて突然開いた扉。それに、中にいた人物は驚いて小さい

悲鳴を上げる。

「だ、誰ですか？」

酷く驚いたトーンの高いその声は、健介へと矛先が向けられている。そしてそれと同時にあの音色は止んだ。健介は氷結したような状態で、部屋の中へと入ってしまう。

「す、すみません。ちょっと倒れ掛かって……」

健介は、倒れ掛かってしまつて、扉を開けてしまつた、などと嘘を言つて、とりあえずこの場を脱出しようとする。

しかし、部屋を開けた時に健介の目に、赤い閃光の様なものが直撃する。夕日の光である。あいにくカーテンが閉まつてなかつたように、激しく燃えているような夕日の不意打ちを受け、健介の視界は、眩し過ぎて何も見えなくなつた。

「うわっ！ 眩しつ……」

健介は情けない声を上げると、その場をフラフラと歩き出す。

そして、健介は情けない末路を辿る事となる。

視界を失つた健介は、足元にあるそれを発見する事が出来なかつた。漫画やアニメでよくありそうな瞬間が今、現実になつた。

つるっ！

軽快な音が、室内に響く。そしてそんな悲しい場面で、ついに健介は視界を取り戻す。

不思議な感覚が健介を包み込む。宙を浮いてるようなその感覚を楽しめるほど、健介は平気な状況ではなかつた。

自分の足の方面を見ると、そこには黄色い物体があつた。あれ？あれ良く俺知つてるよ。猿が食つてるあれだろ。うわー！何であんなもんがあるんだろ。見舞い品？へえー……。じゃあさ。俺はあの見舞い品もつて来た奴、俺は一生恨むよ。心に誓うよ。うん。

健介は微笑みながら、心の中でそう思つた。

そして次の瞬間、健介の表情は激変した。

「ふざけるなあー！ この馬鹿っ……！」

健介の言葉も意識も途中で途切れた。何もかも、あの黄色い物体の前には無意味と化していた。健介は後頭部をその場に強く頭を打ち付け、静かに倒れ込んでいた。

そんな情けない様子を、夕日は嘲笑っているかのようにだった。

## 第十二章

「健介ー！ 早く行こうよ」

何度も聞き覚えのある、優しくて温もりのある甲高い声。それが健介の頭の中で、鮮明に蘇る。求めずにはいられない、忘れる事の出来ない存在。

綾香は確かに死んだ。それは覆る事の無い、現実。それを認めなきゃならない。認めなきゃならない現実なんだ。だけれど……。

「行こう。健介」

そう言つて、優しく差し伸べられた時の手を、健介は忘れることは出来ない。思い出に残る、彼女の笑顔が、いつも健介の心を支えていた。

だからこそ、そう簡単に認めることが出来ない。認められない。彼女が生きていて欲しいと。……心の底から、健介はいつまでも思っていた。

いつまでも……。そして、これからもその気持ちは決して変わりはしない。

「……………」

健介は、微かに意識を取り戻した。

まだ彼の視界はぼやけている。瞼がとても重く、非情に眠たい。

そんな眠気に耐えながら、健介は必死に目を開ける。そして、健介の視界には全く予期しないものが入った。

健介の視界の先。そこには、女の子がいた。女の子の顔が、健介の視界の先にある。髪の毛は栗色の、さらっとした鮮やかな髪。肩まで伸びたその髪の毛には、思わず見とれてしまう。そしてその髪の毛は、その女の子にとっても似合っていた。彼女のつやのある綺麗な髪に、健介は思わず触れてしまいそうになる。

そしてその子は、健介からすれば、何となく綾香に似ているような気がして仕方がなかった。

実質、綾香とその子は全然似ていない。髪長さも、断然綾香の方が長かった。

だけれど、その子と綾香との雰囲気はそっくりだった。まるで姿が違う綾香が、そこにいるような感じすらした。にこやかなその表情は、まさに彼女そっくりだった。

「……綾香……」

そして思わず、健介はそう呟いてしまった。ヤバイ。ばれたか？ そんな事を考えながら、健介はやっと今自分が置かれている立場について冷静に考え始めた。そして、さっきから俺の額にある温もりは何なんだろう？

健介はそんな疑問を抱きながら、その正体を確かめるために、健介は自信の右手を温もりが感じられる額へと、そっと伸ばす。

そして、温かくて柔らかいものに触れた。

「きゃあ！」

それと同時に、健介の目の前にいる女の子は表情を陰しくした。驚き、表情が引きつった。健介はその様子を見て、自分が触れたものが何か、やっと理解することが出来た。

「わ、わわわ！ ご、ごめん！」

そう言って健介は突如起きあがる。すると女の子はまた再び、わっと小さく悲鳴を上げた。

「ご、ごめんよ。俺……君の右手を」

そう言って健介はオロオロとした様子で話しかける。情けなさすぎるその姿。周りから見れば、笑い事同然であろう。

けれど、彼女は違った。

くすくすと微笑みながら、健介に優しく話しかける。思っていた反応と違うそれに、健介はただただ驚くしかなかった。



「えっと……怒ってないの？」

「……え？ 何で怒る必要があるんですか？」

彼女は本当に疑問そうな顔で、健介の顔をじっと見る。流石に健介も、彼女に見つめられるのは恥ずかしいのか、ずっと健介は目を逸らした。

「だ、だつてさ。俺、君の右手握っちゃっただろ？ その……驚かしちゃって……」

恐る恐る健介は彼女に問いかける。どうしよう。むっちゃまずい事、俺しちゃったよな。初対面の人に向かって、俺……。

思わず健介はため息をつく。長く、大きいため息。その為息を聞いて、目の前にいるその娘は、くすつと再び微笑んだ。

どうして初対面の奴に、こんなに笑えるんだ？ 健介はそう思いながら、きょとんとした様子で、健介はただただ彼女を見つめた。

「良いんですよ。どうせ悪気はなかったんですよ？」

そう言つて、彼女は予想外の反応を見せる。本当に驚く事ばかりで、健介は思わず言葉を失ってしまった。しかし、そう言い切るものの、彼女の頬はほのかに朱を浮かべていた。やはり、恥ずかしかったに違いない。健介は申し訳ないと思う事しか出来なかった。

「私、咲野華綾って言います。……貴方の名前は？」

突然の自己紹介に、健介は更に驚く。何て人なつっこいんだ？ と思いながらも、彼女の性格の良さに感謝すらした。彼女が、もしも怒りっぽい性格だったなら、俺は今頃変質者、などとも呼ばれてナースコールされてしまっているはずだ。

「……俺は……。俺は、浅野健介って言います」

健介は改まって彼女に、華綾に自分の名前を名乗る。女の子にこんな風に自己紹介するのは、何だか初めてのような気がした。それが新鮮でたまらなかった。

そしてこの時、健介は思い出した。彼女の名字が「咲野」だと言

う事を。

「……咲野？」

健介は思わずそう呟いてしまった。

何故なら、彼女の名字と綾香の名字とが一致していたからだった。  
到底、今の彼には偶然だと割り切ることはできなかった。

## 第十三章

あれから健介は、彼女　咲野華綾と駄弁りまわっていた。お互い初対面で、お互いの事を何も知らないというのに、二人は昔からの知り合いであるかのように、笑顔を絶やさず話していた。話題が尽きる事など、絶対にありはしなかった。

しかし実際のところ、彼女の人懐っこい性格だったからありえた話だった。

そう健介は、彼女の性格に心底感謝していた。そうでなければ、今頃俺はナースコールされて……、と考えるのが健介にとって非常に恐ろしい事だった。そして、それだけじゃない。華綾の雰囲気が綾香と全く同じだったからこそ、健介は違和感も無く、彼女と話できたに過ぎない。

健介は華綾の事を、この会話を通じてたくさん知る事が出来た。

華綾の好きな食べ物。好きなヴォーカル。好きな色、などなど色々な事が分かった。そして、何故彼女がこの病院に入院しているのかも。

彼女も、誰か大切な人を失い、精神的苦痛を味わった事がある、健介と同じ境遇の持ち主だった。誰が死んでしまったのかは、流石に健介も聞きはしなかったけれど。

それだけでも、健介は親近感を沸かすにはいられなかった。

そして、それだけじゃなかった。華綾も健介と同様で、体の何処にも異変らしい異変は見つからなかったというのに、秀雄に入院するよう診察されたらしい。彼女の親も、秀雄のその意味不明な診断に頭を悩ましたが、已む無く彼女を入院させたと言う。

どうやら、華綾に本当にもしもの事があつたら困るから、という彼女の父親の娘を思いやる気持ちの表れのようなのだ。

そういう事で彼女は健介と全く同じ境遇を持ち、意味不明の診断をされて入院し、そして綾香と同じ雰囲気を持つ。

健介には、もう華綾はあかの他人とは思えない存在となっていた。  
「はぁ……華綾ちゃん……かぁ」

そんな頃、健介は自室のベッドで意味も無くため息をつき、彼女の名前を発していた。よほど彼には大きな影響を与えたようで、今の彼の脳内は華綾の事ばかりで満ち溢れていた。

「彼女、綾香と本当にそっくりだったよな」

何度も何度も頭に浮かぶ、彼女の持つ雰囲気。綾香と限りなく近いその雰囲気ので、まるで再び自分の前に綾香がやって来たのかと思うほど、健介の感覚は鈍らされていた。

綾香は死んでなんかいない。今だって、俺の近くで生きている。

そんな思いが再び段々と強くなってゆき、その度に健介の心を強く締め付ける。

「やぁ。彼女に逢った様だね」

再び、健介の病室に声が響く。もうこの感覚には慣れた、とばかりに健介は表情一つ変えずベッドから起き上がり、よお奈落。どうしたんだ、などとぼさく。

「……君、もう僕の事何とも思っていないようだね」

少しばかり奈落は呆れた様子で、自分の毛をくしゃつと掻く。もう少し面白い反応を期待していた奈落は、期待を裏切られて面白く無さそうだ。

「ああ。そろそろ慣れてきたよ。それに、何だか気が少し楽になったような気がするんだ」

「……彼女の雰囲気は綾香さんにそっくりだから？」

奈落は、少しにやりと不気味な笑みを浮かべて、低い声でそう呟いた。その言葉に健介は反応せざるを得なかった。自分の死角を的確に射抜いてくる奈落。一瞬にして見抜かれた。しかし、それもそ

ろそろ当たり前のように健介は感じていた。

そして、しばらくの間静寂が続いた。この張り詰めた空気にも、そろそろ健介は慣れ始めてきていた。

しかし、その空気は更なる重みを増して健介に襲い掛かった。

「あーあ。たった一人失ったくらいで、立ち直るのにこんなに時間かかるなんてね。そんなんじゃ、君は人を殺す恐ろしさに絶対耐えられないよ」

その一言が、健介の心を強く揺り動かす。

健介のあの陽気な表情は、いつの間にか張り詰めた表情へと変貌しており、冷徹さに満ち溢れた奈落の瞳を見る。そこには初めて会ったあの日の奈落がいた。人の命を道具のようにしか見ていない、あの頃の奈落に。

「ど、どういう事だよ……奈落。人を殺す恐ろしさに……耐えられないって」

「え？ そのまんまの意味だけど。逆に、君は人を失うのに慣れちゃうと思うけどね」

奈落は表情一つ変えないまま、幼稚な声でそう答えた。しかし、幼稚な声で放たれたその声には、尋常では無い重みがあった。

「君にはさ。殺してもらわなきゃいけない人がいるんだよね。……その死生の魔眼を使ってさ」

次の瞬間健介の背筋に悪寒が走る。奈落の瞳からは、光が感じられず、冷徹なその瞳が健介の姿を捉えている。しかし、奈落の瞳には健介の姿は映っていない。

再び、あの場面が蘇る。すべての始まりを告げられた、あのおぞましい場面。嫌な予感がする。あの時と同じように、俺の心の何かが奪い取られてしまうような気がする。

「な、奈落っ！ 一体何だって……」

そんな時、驚愕の表情を浮かべた健介。周りの音が入っていない。

しかし、彼の瞳が、奈落の姿を。口の動きをしつかりと捉えていた。普通なら伝わらない事が、感情の激流で研ぎ澄まされたのか、健介の視線と神経は、奈落の口の動きを見るだけで、奈落が何を言っているのが伝わった。

そしてその奈落の言葉に、健介は言葉を失った。そして、そこで意識を失ったかのように、健介は座り込んでいた。

「じゃあ。頼んだよ。健介君」

そう言って、悪戯っぽい瞳で健介の前から姿を消した。空気に溶けるように、彼の姿は一瞬で消え失せた。音も無く、ただ静かに。全てが失われるようなこの空気には、何度も出くわしはしていたが、慣れる事は到底無理だ。

先程まで声で満ち溢れていた病室も、一瞬で静かになった。

静か過ぎるせいで、他の病室で騒ぐ音なんかが、健介の耳に鬱陶しいくらい入り込む。しかし、そんな事を気に止められぬくらい、彼は落ち着いてなんかいなかった。

「は、ははは。何だよ……それ？」

健介は狂いきったように、笑い出した。そして自分の両手で顔を覆い隠す。心の中は言葉にならない叫びでいっぱいになる。

「どうして……俺がこんな目に逢わなきゃならないんだ……？」

健介はただそう呟き続ける。彼の震える両腕は、とても弱々しくて、見ていられないくらいだった。しかし、彼を支えるものは何も無い。

「どうして、俺が……っ」

「  
咲野華綾を殺して。その魔眼の力でね」

奈落が最後に告げた言葉。それが今、彼の脳内に蘇った。

「ふざけるなあああああ！」

健介の思いは、とうとう爆発するように弾き飛び、悲痛が彼の全身を締め付ける。哀しみか苦しみか。何とも言えないそれは、一気に叫び声となって放出された。取り戻せるかと思っていた日常が、再び遠のいて行くのが健介には理解できていた。

彼の部屋の閉め忘れたカーテンの隙間から、外の景色は一発で分かった。

もう既に闇に染まった空には、煌びやかに輝く星が点々とあった。まるで、繰り返される悲劇の訪れを歓迎するかのよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0791d/>

---

死生の魔眼

2010年10月12日01時02分発行